

## 「キリストを信じる信仰の闘い」 ダニエル 3：16～30

### I 導入部

おはようございます。2月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

カレンダーを見ますと、2月11日は、建国記念の日とあります。「建国記念の日」はかつて「紀元節」と呼ばれ、1873年に明治政府が制定した天皇制国家の“建国記念日”であった。紀元節は「日本書紀」の「神武建国」神話に由来し、天照大神の直系「神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと）」＝後の「神武」が初代天皇に即位したとされる日（BC660年＝皇紀元年1月1日）を指しています。

キリスト教会では、2月11日は信教の自由を守る日とされ、各地で集会が開かれます。

明治時代、国家宗教とキリスト教が衝突した事件が、「内村鑑三一高不敬事件」（1891年）です。第一高等中学校の嘱託教員内村鑑三（31歳）が教育勅語奉読式において十分に拝礼（最敬礼）しなかったと非難攻撃されました。「教育勅語」は、表向きは道德の根本、教育の基本理念を教え諭す勅語（天皇が直接国民に発する言葉）とされますが、欧米列強が基盤とする神の言葉である聖書に対抗すべく、現人神（あらひとがみ）である天皇の言葉として天皇崇拜とその臣下である国民は天皇に命を捧げることを命じたものなのです。

私たちは、どのような時代が来ようとも、イエス・キリスト様を通して与えられる罪の赦しと魂の救い、復活の命の望みを持って、歩みたいと思うのです。

今日は、信教の自由を守るということから、ダニエル書3章16節から30節を通して、「キリストを信じる信仰の闘い」という題でお話しします。

### II 本論部

#### 一、イエス様を信じるがゆえの摩擦が起こる

今日、登場するシャドラク・メシャク・アベド・ネゴは、ユダヤからバビロンに捕囚民として連れてこられました。この3人は、ダニエルと共に、「体に難点がなく、容姿が美しく、何事にも才能と知恵があり、知識と理解力に富み、宮廷に仕える能力のある少年」（ダニエル1:4）として選ばれたエリートでした。彼らはカルデヤ人の言葉と文書を学び、養成された選ばれた人々でした。

2章においては、ネブカドネツアル王が夢を見て、夢の内容と解釈を求め、バビロンの賢者の中には、その夢の内容を話し、その夢を解く人はおりませんでした。ダニエルは、神様を信じる者として、王のみた夢の内容を語り、その夢の解釈をしたのです。すると、ネブカドネツアル王は、ダニエルに対して、「あなたがこの秘密を明かすことができたから

には、あなたたちの神はまことの神々の神、すべての王、秘密を明かす方に違いない。」(ダニエル 2:47) と言って、ダニエルを高い位につけ、シャドラク・メシャク・アベド・ネゴをバビロン州の行政官に任命したのです。

このようにシャデラク・メシャク・アベド・ネゴは捕囚民としてバビロンに連れて来られたにもかかわらず、バビロンでは高い地位にあったのです。ネブカドネツアル王が、3人の信じる神に対して、ほめたたえたのですから、信仰的な事柄に関しても安心できることでした。しかし、人間とは時間がたてば変わってしまう者です。

3章になると、「**ネブカドネツアル王は一つの金の像を造った。**」という言葉から始まります。金の像を建てただけなら問題はありませんが、除幕式の時に、楽器による音楽が聞こえたなら、金の像の前にひれ伏して拝め、という命令を出したのです。そして、「**ひれ伏して拝まない者は、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれる。**」(3:6)という命令を決めたのです。

ですから、ほとんどの人々が音楽が聞こえたら金の像を拝んだのです。

カルデヤ人の中には、捕囚民として連れて来られた3人が、高い地位についているのをよく思わない人々がいました。彼らは、シャデラク・メシャク・アベド・ネゴが命令に対して無視し、王様の神様に仕えず、金の像を拝まないことを告げ口したのです。

3人は、命令が出て今までと変わりなく、天地宇宙を創造された神様を礼拝し、金の像を拝むことはしませんでした。現代の私たちの信仰に対して、命を奪われるというほどのものはありませんが、イエス様を信じることに對する闘いは、それぞれにあるのではないのでしょうか。イエス様を信仰するゆえに、バカにされたり、無視されたり、いじめられたりということがあるのかも知れません。日本の神々との間で、その神々を信仰する人々の間での摩擦やいざこぎは存在するのです。

## 二、神様を素直に信じる

シャデラク・メシャク・アベド・ネゴが自分の建てた金の像を拝まない。命令を無視していると聞いたネブカドネツアル王は激怒します。そして、今音楽が聞こえたら、金の像を拝め、さもないと、燃える炉の中に投げ込ませる。「**お前たちをわたしの手から救い出す神があるか。**」(3:15)と言ったのです。「**お前たちをわたしの手から救い出す神があるか。**」という言葉は、傲慢な者、権力と力を見せびらかす者たちの常套手段の言葉です。

絶体絶命、プレッシャーのかかる事態でした。今、韓国の平昌（ピョンチャン）で、冬季オリンピックが開催されました。フィギアスケート団体戦で、宇野昌磨選手は、2位に15点差をつけて1位でした。国際スケート連盟の公認大会で、1シーズン5度目の100点越えをしたのです。これは史上初の記録です。オリンピックという大舞台で、プレッシャーのかかる試合で、彼は自分の持てる力を出し切ったのです。

シャデラク・メシャク・アベド・ネゴは、プレッシャーのかかる大一番で、自分の命にかかわる状況の中で、ネブカドネツアル王の脅しに答えたのです。

皆さんと共に16節から18節まで読みましょう。「**シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツアル王に答えた。「このお定めにつきまして、お答えする必要はございません。わたしたちのお仕える神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うこと**

ができますし、必ず救ってくださいます。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拜むことも、決していたしません。」

彼らは、ネブカドネツアル王の脅しにはっきりと答えました。「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。」と。何があっても、どんなことが起ころうとも、危険が迫ろうとも、自分たちの信じる神様は、全能なるお方、この窮地、金の像を拜まないことで火の燃える炉の中に入れられても、神様は必ず救って下さる。助けて下さると信じているのです。神様は守ってくださるといいな。助けて下さればいいなではないのです。必ず助けて下さると信じているのです。絶対に、100パーセント助けて下さるのですか。絶対絶対に、本当に助けて下さるのですか。間違いない事ですか。彼らは、間違いないと信じているのです。

彼らは続けて、「**そうでなくとも、御承知ください。**」と言いました。口語訳聖書には、「**たといそうでなくても**」とあります。私の信じる神様は、必ず守り、必ず助けて下さると信じる。信じるけれども、炉の中に入れられて焼け死んだとしても、燃える炉の中から助け出されなかったとしても、神様を信じますということです。

助け出して下さるので信じる。守って下さるので信じるのではないのです。助け出せるかどうかで信じる信じないではなくても、助け出してもらおうが、助け出されないでも、私は私の神様を信じるのです。「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。**」(ヘブライ11:1)とあります。私たちはイエス様を神様として信じ、いつも共におられ、私たちを守り、助けて下さると信じるのです。

### 三、神様を信じることは状況で変わらない

シャデラク・メシャク・アベド・ネゴは、自分たちが助け出されようが、殺されようが、金の像をおがまないことをはっきりと伝えたのでした。見上げた信仰です。しかし、3人の信仰告白を聞いたネブカドネツアル王は、血相を変えて怒り、炉をいつもの7倍熱くするように命じて、3人を縛り上げ、頑強な兵士に命じて、火の燃える炉の中に投げ込んだのです。絶体絶命です。なぜ、神様は3人の信仰に対して、火の燃える炉の中に投げ込まれることから助けて下さらなかったのでしょうか。一卷の終わりです。

しかし、聖書は、3人は縛られたままに自由に歩いているのが見えるとネブカドネツアル王は言いました。そして、3人ではなく、4人の人が見え、何の害も受けていないことがわかったのです。そして、その4人目は、神の子のような姿をしていると言ったのです。

何か、ドラマの世界、映画の世界のような内容です。信じられないことです。その一番信じられなかったのは、ネブカドネツアル王だったと思うのです。王は、自信たっぷりに、「**お前たちをわたしの手から救い出す神があるか。**」と言いました。そんな神は、人間が作った神々の中にはいないのです。人間の作った神に、人間を救うことはできません。人間を救うことのできるお方は、人間を創造されたお方だけなのです。いつもよりも7倍の熱量で、3人を引いていった兵士さえも焼き殺すほどの勢いの炎。その中に投げ入れられた3人は、なんの害も受けずに、歩き回っている姿を見て、しかも、第四の男、神の子のような者が3人を先導するかのよう、守っているかのよう、4人の姿がはっきり見え

たのです。

ネブカドネツアル王は、3人に燃える炉の中から出てくるように言うと、3人は出てきました。何の害も受けず、しかも、髪の毛も焦げず、上着さえも火のにおいもしなかったのです。完全なる神様の勝利、3人の信仰による勝利でした。「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。**」という信仰でした。めでたしめでたし。

私たちも、疑わないで神様を信じていきましょう、といたいのですが、私たちの現実には、助けられなかった。守られなかった。与えられなかった。そのような現実を私たちは経験しているのです。神様を信じたって、守られない。助けられない。与えられない。だから、神様を信じないといって、信仰を捨てた人々もいます。あまりの苦しみと悲しみ、絶望を通して、神様なんて信じられないと信仰から離れ、教会から離れ、聖書や祈りから遠ざかっているクリスチャンの方々が多くいるのではないのでしょうか。

シャデラク・メシャク・アベド・ネゴは、「**そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拜むことも、決していたしません。**」と言いました。彼らは、必ず助けて下さると信じています。これが信仰です。助けてくれる、助けてくれないというのは、彼らの内にはないのです。必ず、助けて下さるという信仰を持っているのです。だから、助けて下さると信じ切っているけれども、たとえ、自分たちの思い通りにならなくても、神様を信じないという選択をしないということです。助けて下さらないかも知れないので、金の像を拜んで、自分で自分の立場を守るということではないのです。彼らにとって、神様を信じないということは、自分を信じるという偶像礼拝に匹敵することなのです。自分が神様にとって代わるということです。そうすると、自分の判断で何でも行動することになるのです。それが自己中心の始まりなのです。

### Ⅲ 結論部

神様は、全ての人に平等に救いの道を開かれました。時代を超えて、場所を超えて、男女を超えて、年齢を超えて、全ての人に神様の愛を示されたのです。見えない神様が見える神様として、神様が人となって人間の世界に来られ、私たち人間の罪、神様から離れて自分で何でも考え行動する自己中心の罪の身代わりに、イエス様が十字架にかかって死んで下さり、尊い血を流し、命をささげて下さいました。その流された血、捧げられた命、その死を見て私たちの罪を赦され、イエス様がよみがえることによって私たちに永遠の命を与えると同時に、神様の前に義として下さったのです。

私たちは、信仰の闘いが迫られる時が来るかもしれません。私たちは、自分の思うようにならなくても、苦しみや悲しみが続こうとも、絶望を経験しようとも、私たちのために絶望をすでに経験し、苦しみの極みを経験されたイエス様は、私たちの苦しみを知り、そのままにはされないお方なのです。心配することなく、一番良いようにして下さいと信じて、安心して、イエス様に全てを委ねて、この週も歩んでまいりましょう。